記者の「共感力」あらわに

新型コロナ感染拡大により、図書館が長期にわたり休館となり、再開も延期続きだ。図書館で定期的に行ってきた新聞読み比べ、地方紙のチェックができない。私にとって「コロナ・ショック」である。

写真は朝日新聞 3 月 27 日朝刊、「池上彰の新聞ななめ読み」に掲載された、自殺した近畿財務局職員の妻が国と佐川氏を相手に提訴したことを伝える 19 日付の各紙。池上氏は記者生活を振り返り、標題と関わらせて新聞各紙をコメントしている。途中から紹介したい。

3 月 19 日付本紙朝刊は、1 面トップでこのニュースを伝え、2 面、4 面、39 面でも扱っています。実はこの話は「週刊文春」が先に報じているのですが、弁護団が職員の手記や遺書を公開したことで、新聞各紙も報じることができました。

週刊文春でこのニュースを伝えたのは、NHK 大阪放送局で森友事件を取材していた相沢冬樹氏。NHK 内の人事異動で記者を外され、いまは大阪日日新聞記者です。記者魂とはどんなものか教えてくれます。

では、朝日以外の新聞は、このニュースをどう伝えたのか。毎日新聞は同日付朝刊 1 面の左肩に掲載しています。朝日ほどではありませんが、それなりの報道です。

1 面での扱いは大きくありませんでしたが、26 面に残された手記の全文を紹介しています。朝日は手記の要旨しか掲載していなかったので、この点で毎日の扱いが光っていますね。読者は週刊文春を買わなくても全体を把握することができたのですから。

読売新聞は、どうか。34 面に「自殺職員の妻提訴」という 3 段見出しの記事です。4 面の政治面でも財務省の対応を小さく報じていますが、これだけです。記者には「共感力」が求められると冒頭に書いたのは、この扱いを見たからです。

公文書を改竄をするように求められた職員が自殺し、改竄の経緯を記した手記を残していた。職員は、改竄を求められたことなどからうつ状態になり、自殺。その後、財務省の近畿財務局は、公務災害に認定している。これは大ニュースでしょう。これを大きく扱わないというのは、どういうことなのか。現場の記者が短い原稿を書いただけだったのか。それとも現場の記者はしっかりと原稿を書いたのに紙面化の段階で小さな扱いになったのか。真相は紙面を見るだけではわかりませんが、記者の原点に返ってほしいと言いたくなったのです。

一方、日経新聞は、提訴の記事だけでなく、職員が残した手記の要旨も掲載しています。日経新聞の記者の方が、読売の記者より「共感力」があるように思えます。

（2020 年 3 月 29 日）